

働きつつ学ぶ論文執筆に至る具体的こつ

原田佳子

1. はじめに一論文を執筆するまでの道のり

私は、広島市内でフードバンク活動を行っています。論文との出会いは、この活動を通してでした。

その辺りを説明しつつ本旨に迫っていきたいと考えています。

私は、管理栄養士として、出だしは、子どもたちの給食の栄養管理や食育を行う学校栄養職員（広島県）、その後、病院に転職し、患者の栄養指導に当たってきました。その頃から、食事や食生活と疾病の関係調査を行い、地域の研究会や全国規模の学会等で報告を重ねてきました。主に、被験者への介入なしあるで、経過観察し結果を比較検討し考察するやり方です。研究方法や調査報告など学んだことがありませんでしたので、他の論文や文献を読みましたが、自己流の行き当たりばったりでした。学会等での発表が業績に繋がり昇給に反映されましたので、それが大いにモチベーションになっていたことは否めません。ただ、動機はどうであれ、データの必要性や重要性の理解に繋がっていきました。いわゆるデータ、根拠に基づいて考察し結果を導く。

ある日のことです。経済的理由で、私の栄養指導がなかなかうまくいかない患者に遭遇しました。その時初めて、経済格差が健康格差に繋がることを仕事を通して実感しその意味を理解したのです。それが、フードバンク活動の起ち上げに繋がりました。もったいない食べ物（食品ロス）を、タダで貰って食べることに困っている人たちにタダで配布する。活動の主体は地域のボランティアさん達。地域の居場所にもなるし、何て！合理的でいい活動だと自画自賛していました。食べ物を扱う活動だから管理栄養士の乗りで何とかなると高を括っていたのです。ところがです。スタートさせてみると、経営、財政、組織・・・など、フードバンク活動を軌道に乗せるためにはあらゆる場面でマネジメントが要求されるのです。困った！社会学の基礎的知識が必要だ！そこで、門を叩いたのが、社会人も OK の広島大学大学院社会科学系研究マネジメント専攻科でした。研究テーマは「フードバンクのミッションの違いと活動方法」大学院は研究する所ということあまり理解していなかった私は、このテーマで、後々苦しむことになります。

1年の時は、興味の赴くままに授業を履修しすぎて、かなり大変な日々でした。朝3時起床し2時間は授業で課せられたレポート作成、5時から家事を済ませて出勤。幸いにも職場がフードバンク活動の後方支援してくれたので、病院で管理栄養士しながらフードバンクの活動をし、夕方から大学院へ通うことができました。時間のやり繰りは、相当ハードでしたが、新しい学びは、何とも楽しくてたまりません。

修士2年目から修士論文に取り掛かりましたが、何をどう書けばよいのかさっぱりわかりませんでした。そもそもどこから手を付けてよいのか皆目見当がつかない。管理栄養士の時の研究報告とはまるで様子が違うのです。でも、とにかく実態調査を行って、それぞれ比

較検討することから着手しました。実態調査ですから、全国のフードバンクをミッションごとに分けて、アンケート調査を行い、その中から、いくつかのフードバンク活動主体にインタビューする。でも、ここでも躓きました。わが国のフードバンクは、始まったばかりで、活動主体者数が極端に少ない、ミッションそのものも明確でない。そこで、全国のフードバンクの活動実態をウェブサイトなどで確認しつつ自分でミッションを分類し作成する。この作成したミッションが、現在、色々な研究や調査で使われていますので、苦勞した甲斐があったと思っています。「ないものは、作ればよい」と実感した作業でもありました。アンケートは、多くの研究で行われていますが、何を質問するかは重要なポイントになります。ここは、主査の先生に教えを頂いたり、他の社会調査の方法を調べたりしました。とにかく、フードバンクが日本に登場して数年しか経過しておらず、先行研究は見当たらず、自分自身も活動を始め多ばかりで、暗中模索というより五里霧中の言葉が妥当ではと思うほど大変でした。で、仕上げた修士論文は、研究とは程遠く、思い出すにつけ赤面物です。

しかし、その後、幸いにもフードバンク活動が軌道に乗り、私の中でも課題が明白となってきた、「日々の活動（働き）の中から見えてきた課題を解決すべく論文にする」という正しく実践と理論の融合というべき形が整ってきたと感じています。

取り留めのないことを語る述べてまいりました。

2. 論文執筆のこつに関して

1. で私の論文執筆の出だしを紹介しました。以下は、日ごろの活動から習得した論文の執筆のこつを述べてまいります。

論文の構成は、研究テーマ、要旨、序論、研究方法、研究結果、考察、展望、謝辞、参考文献となっていきます。研究テーマと方法に関して触れていきます。

① 研究テーマ

このガイドブックでは、「働きつつ学ぶ」が大きなポイントです。仕事（活動等）をしていると、必ず疑問に思うことが出てきます。その疑問の原因はどこ？大きく二つに分けられます。工夫することで比較的容易に短時間で解決する疑問。構造的なことに起因する疑問。論文になるのは、後者の方。さらに起因となる構造的なこととは何か？この辺りが、論文のテーマとなります。働きつつという自身の置かれている環境は、まことに恵まれています。自身の周辺に至る所に課題が転がっていて、容易に研究テーマを見出すことができるからです。私の場合は、フードバンク活動を行っていて、膨大な食品ロスと貧困や格差拡大と日々対峙することで、どう考えても偶々ではないのではと疑問を持ったことが論文に繋がっていきました。実社会と結びついている仕事や活動が、研究テーマに直結していますから、丸ごと日常が研究そのものということになります。

② 研究方法

自然科学でも社会科学でも、仮説を立ててそれを論理だてて立証していくのは同じです。ただ、社会科学の場合は、様々なバイアスが多数あるので、また、一括りにまと

めて扱うことが難儀ですので、ああじゃない こうじゃないとかなり多くの立証が必要になってくるでしょう。比較検討する場合は、何を指標にするのか、これはとても重要です。自分が何を立証したいのかをしっかりと把握しておかなければ、とんでもない方向に結論が導かれることになります。例えば、私は、日本と韓国のフードバンク活動の現状を比較した論文「わが国と韓国におけるフードバンク活動主体者と支援者との関係性の研究」を作成したことがあります。その時、日本と韓国のフードバンク活動主体者を組織（ミッション、組織の形態と運営）、活動（食料の流れ、活動方法、行政との協働及び関係性）という指標で比較しました。これによって、韓国のフードバンクの概要をつかむことができました。

3. さいごに

私たちは、何のために働くのか、糧を得るため 生活するため 当たり前のことですが、多くの方は、それだけでないでしょう。そこで、改めて考えてみると論文のネタが見えてまいります。

話が、前後しますが、働くこと活動することは、「それらを通じて、自分自身を向上させ仲間と情報を共有し、現状を認識し、課題を共有し、職場や活動の仲間と共に課題解決に努め、安心して暮らすことのできる社会を構築する。」私は、このように考えています。となると、必然、働きつつ学ぶ論文執筆に欠かせないポイントは、誰のための何の論文であるかということになります。論文が市井に生活するごく普通の多くの人の役に立つものかどうか、ここが肝。金が主人公の社会ではなく、生活者の社会。必然、働きつつ学ぶ論文執筆に欠かせないのは、人を観る温かい眼差しであります。